
第6章

イスラーム化の進行とイスラーム系
政党弱体化の矛盾

見市 建



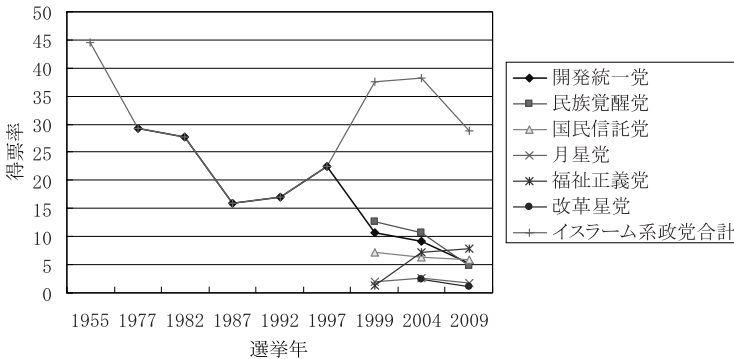
英語の授業を受けるアチェのプサントレン女子生徒たち（見市建撮影）

はじめに

すでに第1章で分析がなされているように、2009年の国会選挙ではイスラーム系政党の得票率が約10%低下した。福祉正義党はわずかに得票を上昇させたものの、同党が目標としていた得票率の倍増と3大政党の仲間入りにはほど遠かった。イスラーム団体ムハマディヤをおもな支持母体とする国民信託党は横ばい、最大のイスラーム団体ナフダトゥル・ウラマー（NU）を支持母体とする民族覚醒党と開発統一党は得票率を大きく減らした。1950年代に4大政党のひとつだったマシュミ党の継承を目指して1999年選挙から参加してきた月星党に至っては、代表阻止条項が規定する2.5%の最低得票率を割って議席を得ることができず、存立の危機に立たされている（図1）。

それではインドネシアにおいてイスラームの重要性が低下しているのかといえば、むしろ逆である。同国社会におけるイスラーム化の進捗については異論がないだろう。1980年代以降、ベールを着用する女性の割合は明らかに増え、モスクなどの宗教施設は大幅に拡充された。大学ではイスラーム系の学生運動が主流となり、アラビア語の挨拶も一般化した。世俗系政党の政治家でもその演説の冒頭で長々とアラビア語の挨拶を披露するようになった。イスラームの

図1 イスラーム系政党得票率の推移



(出所) 筆者作成。

(注) スハルト体制期の1977～1997年まではイスラーム系政党の合計は開発統一党の得票率を示す。福祉正義党は1999年選挙は正義党として参加した。

急進化を危惧する声も少なくない。反ボルノ法の採択や異端とされるアフマディヤ教団の禁止、地方自治体におけるイスラーム法の適用などが問題視されている。2009年7月にはジャカルタの2カ所の米国系ホテルで同時爆弾テロが起こった。ではなぜイスラーム化がより進行しているにもかかわらず、イスラーム系政党は後退したのか。これが本章における問いである。

まずイスラーム系諸政党を個別に検討し、大きく得票を下げた政党、わずかながら得票を増やした政党、横ばいの政党について、それぞれの理由を説明する。筆者はイスラーム系政党の停滞は中長期的な社会変化を背景とすると考え。近年のイスラームと政治をめぐる状況を踏まえ、世論調査や特定地域の選挙結果、さらに大統領選挙をめぐる駆け引きや有権者の反応の分析を通じて、その変化を明らかにしていきたい。

第1節 インドネシアにおけるイスラーム系政党

端的に言って、現代インドネシアにおけるイスラーム系政党には3つの特徴があり、それぞれの要素が混在している。

- 教育機関を基盤とした**大衆団体**を支持母体とする政党→民族覚醒党、開発統一党、国民信託党
- **イデオロギー**政党（イスラーム法の適用など）→福祉正義党、月星党
- **都市中間層**へアピールする包括政党→国民信託党、福祉正義党

NUは独立後にイスラーム諸団体が結成したマシュミ党に参加して以来、つねに特定政党の支持基盤となってきた。1998年以降もアブドゥルラフマン・ワヒド議長（当時、その後大統領）を中心とする主流派によって結成された民族覚醒党と、スハルト体制期から存続する開発統一党の重要な票田となってきた。世論調査によれば、国民の約3割がNUに帰属意識をもつ（見市 [2004: 102]）。ただしNUへの帰属意識は主として宗教規範や文化的なものであり、NUの組織としての凝集性は低い。実際に票をもっているのはキアイと呼ばれるジャワ島とくに東ジャワ州を中心としたプサントレン（イスラーム寄宿学校）の指導者たちである。キアイはしばしば地域の有力者として政治的な影響力を

もっている。このため政党幹部や選挙の候補者たちは直接プサントレンを訪れ、キアイたちから支持を引きだそうとする。スハルト体制期であれば、唯一のイスラーム系政党である開発統一党を支持するか、政府に従ってゴルカルを支持するかの二者択一であった。しかし1998年以降は選択肢が増え、NUに所属するキアイでも民族覚醒党や開発統一党を支持するとは限らなくなっている。ジャワ島以外にもプサントレンを基盤とした多数の大衆団体がおり、東ジャワにおけるNUと同様の構図がある。

NUと並び称されるムハマディヤも、元議長でスハルト退陣の立役者の1人アミン・ライスらが1998年に国民信託党を設立した。しかしムハマディヤの学校組織はより近代的で、キアイのような動員力がある指導者はほとんどおらず、学校の卒業生の多くもムハマディヤという団体に所属意識を感じるわけでもない。NUと同じように、ムハマディヤに所属意識をもつ家系や地域共同体もあるが、その数はNUに比較するとわずかである⁽¹⁾。したがって国民信託党は、設立当初からムハマディヤの組織に頼るよりも、都市部の住民、とりわけ中間層に対するアピール戦略を採ってきた。2009年選挙では、国民信託党はとくに女性の若い芸能人候補を多数擁立し、信託 (Amanat) と同じ頭文字の芸能人 (Artis) から「国民芸能人党」と揶揄された。

今回の選挙で国会議席を獲得したイスラーム系政党のなかで、唯一イデオロギー政党とみなすことができるのが福祉正義党である。エジプトのムスリム同胞団をモデルとした同党は「宣教政党」と自らを位置づけ、階層的な党員組織をもっている。党綱領を読めば現在までその根本は変わらないようであるが、実践においては現実主義を強めている⁽²⁾。2005年に始まった地方首長の直接選挙では、もっとも世俗的だとみなされている闘争民主党を含むすべての主要政党と相乗り候補を立てており、2009年の大統領選ではいち早くユドヨノ組への支持を表明している。有権者に対しても、おおよそ社会のイスラーム化という目的とはかけ離れたように思われる、むしろナショナリスト的なアピールを前面に出したテレビコマーシャルを繰り返し放映した。コマーシャルの雰囲気は他党のそれに比べて都会的で、登場する女性の多くはベールを着用していない。福祉正義党を継続的に支持する若い女性たちはほとんどがベールを着用していると思われるが、いわゆる「浮動票」を獲得して党勢を拡大するためには、宗教と政治の結びつきを積極的には肯定しないような都市中間層がターゲット

になる。なお後述するように、こうしたあからさまな現実路線には党内からも強い批判や不満があり、福祉正義党はジレンマに直面している。

イスラーム国家の樹立や武装闘争を掲げるより急進的なイスラーム主義組織は少数で、また政党活動には消極的である。彼らは福祉正義党の現実路線に失望し、政党活動より街頭でのデモや政権への直接的なロビー活動によって政治的影響力を行使しようとしている。ここ数年論議を呼んだ異端的なアフマディヤ教団の問題においては、アフマディヤの解散を求める勢力はイスラーム系政党ではなく、インドネシア・ウラマー評議会（MUI）や政府機関に直接的なロビーを行った。

第2節 イスラーム系政党後退の理由は何か

ではなぜこのようなイスラーム系政党が2009年選挙で後退することになったのか。ここでは個々の政党の事情を検討しながら、その理由を明らかにしていきたい。

1. 内部対立

イスラーム系政党の敗退の理由としてまず挙げられるのが、各政党における内部対立の顕在化である。もともと、世俗系政党を含め、主要政党はそれぞれ内部の勢力争いが絶えず、その影響は政党によってまちまちであった。

内部対立がもっとも深刻で、その影響が得票に大きく響いたのが民族覚醒党であった。同党は主導権争いを繰り返してたびたび党首が交代してきたが、ワヒド元大統領派とムハイミン・イスカンダール派の分裂が法廷闘争にまで至り、最終的にムハイミン派の正当性が認められた。ワヒド派の立候補登録は拒否され、ワヒドは総選挙のボイコットや闘争民主党の支持を示唆した。ワヒドには東ジャワ州を中心に相当数の支持者がおり、選挙に参加した（ムハイミン派の）民族覚醒党に少なからぬダメージを与えた。加えて元民族覚醒党東ジャワ州支部長であったホイール・アナムを党首にウラマー国民覚醒党が結成された。影響力のあるキアイが明示的に支持をした同党は、東ジャワ州では健闘した。後述する東ジャワ州3区では、ウラマー国民覚醒党はイスラーム系政党最大の得票であったが、同党が代表阻止条項に規定された最低得票率に及ばな

かったために議席を獲得するには至らなかった。民族覚醒党は得票を半減させ、この減少分が全国的にみてもイスラーム系政党の得票率低下のもっとも大きな理由となった。

開発統一党はスハルト体制下の1973年に当時のナフダトゥル・ウラマー党と旧マシュミ党の諸政党が統合された政党である。スハルト時代から体制側の介入とそれにとまなう内部対立に悩まされてきたが、反体制のシンボルとして根強い支持を集め、ときに最大の野党としての存在感を現した。1999年選挙でも議席数では第3党の立場を維持し、メガワティ政権においてはハムザ・ハズ党首が副大統領に就任した。しかしもともとが寄せ集めの政党であるために、指導者の求心力や明確なイデオロギーはなく、新しいイスラーム系政党に取って代われようとしている。2004年選挙に際しては人気説教師ザイヌディン MZ を筆頭とした一派が開発統一党から分裂して改革星党を結成した。今回の総選挙前においても、NU と旧マシュミ党という旧来の派閥間の争いが表面化した。争点は大統領選挙を見越して、ユドヨノを支持するか否かであった。議会選挙後も迷走は続き、1度はメガワティの大統領擁立を支持したものの、すぐに撤回、結局ユドヨノ側に付いた。

福祉正義党と国民信託党にも内部対立や支持母体の分裂があった。福祉正義党においては地方首長選における機会主義的な連立やあからさまにナショナリスト的なテレビコマーシャルに対して、少なからぬ党員は戸惑いをみせ、イデオロギー的一貫性を求める党内勢力は反発した。しかし、福祉正義党は党内の規律を保って、マスコミ相手に内部の亀裂を曝すような事態にはならなかった。他方、国民信託党は支持母体ムハマディヤのメンバーが新党・民族太陽党を設立、ムハマディヤ議長ディン・シャムスディンの写真を選挙ポスターに掲げた。党の基本原則をインドネシアの建国5原則パンチャシラと規定する国民信託党に対しては、イスラームを基本原則としムハマディヤをより前面に押し出した政党の設立を望む声があるが、大きな流れになったことはない。民族太陽党はイスラームを党原則に掲げたが、わずか0.4%の得票に留まり、国民信託党の深刻な脅威にはならなかった。

2. 世俗系政党との差異の縮小

伝統的に、インドネシアのムスリムは敬虔なサントリとジャワ的要素が強く名目上のムスリムであるアバンガンに二分されて考えられてきた。この概念を定式化したギアツによれば、サントリ／アバンガンは単に敬虔さの度合いが異なるだけでなく、文化的社会的な差異であり、政党支持とも結びついているとされた。すなわちサントリはイスラーム系政党を支持し、アバンガンは世俗ないしナショナリスト系政党を支持する。この宗教的社会的亀裂はアリランと呼ばれる。イスラーム系、世俗系それぞれ2つの政党が4大政党を形成した1955年選挙では、イスラーム系政党の割合は約4割であった。1999年選挙ではイスラーム系政党が1955年選挙とほぼ同じ割合で得票したために、この構図は変わっていないとの分析もみられた

しかし以後、世俗系政党による「宗教性」ないし「イスラーム性」のアピールがなされるようになった。こうした現象は2004年選挙にはすでに見られていた。最も世俗的とみられてきた闘争民主党までも党内にイスラーム部門を設立し、メガワティはNU議長のハシム・ムザディを副大統領候補とした³⁾。ゴルカル党党首のユスフ・カラ（前副大統領）はNUの家系であることをアピールした。逆にイスラーム系政党も有権者に対してよりナショナリスト的なアピールをするようになった。アミン・ライスは大統領選挙立候補に際して『誠実な心で指導する』という評伝を出版した。「誠実」(Nurani)は宗教性も感じさせるが、第1章は「ソロ出身のワヤン（影絵劇）愛好家」と題されている (Uchrowi [2004])。ジャワの伝統文化ワヤンはインドの長編詩を題材とするためイスラームに反するとの見解もあるが、ナショナリスト的（ないしジャワ的）なイメージを強調したのである。

ユドヨノ大統領は2004年選挙から極めて慎重、かつ周到にイスラームにおいて敬虔で穏健なイメージ作りをしてきた。ユドヨノはしばしばジャワで宗教的とされるような服装で公の場に登場し、断食明けの祭には逆にスーツ姿でイスラームの寛容性と普遍性についてスピーチをした。2009年の大統領選においては、ユドヨノと副大統領候補ブディオノ双方の妻がベールを着用していないことが問題視された。ベールを着用している対立候補のカラとウィラントの妻が2人揃ってその「敬虔さ」をアピールすることで対抗したが、ほとんど効果は

なかったようである。

2004年選挙にもみられた世俗／イスラームの接近傾向がこれまで以上に明確になったのが2009年選挙であった。過去2度の大統領選挙においてはメガワティとハシム・ムザディ、軍人のウィラントとNUのソラフディン・ワヒドというように世俗／イスラーム、あるいはユドヨノとカラのようにジャワ／外島出身者による正副候補の組み合わせが一般的であった。2009年選挙においてはこうした組み合わせがみられなくなったが、上記のように候補者の支持を巡って世俗／イスラーム（およびジャワ／外島）という分裂は起きなかった。

写真1・2は2009年選挙のキャンペーンに用いられたロゴマークである。民主主義者党は「ナショナリスト—宗教的」をモットーに掲げた。ここでいう「宗教」はイスラームに限られるわけではなく、国民政党としては「イスラーム」を掲げるわけにはいかない。しかし敬虔なムスリムであることを常にアピールしてきたユドヨノ大統領の姿と重なって、ムスリムは安心して民主主義者党に投票できたはずである。

他方、福祉正義党は「清潔、配慮、プロフェッショナル」というモットーを掲げた。「清潔」は金銭や生活態度におけるそれで、結党以来掲げてきた反汚職のイメージを強調している。Peduliは困窮者や災害被害者に対する配慮やケアなどの文脈で使われる言葉であり、実際にアチュエの津波被害などにおいてはいち早く党員が駆けつけ救援活動を行った。「プロフェッショナル」は高学歴者の多い福祉正義党の実力を強調するといえようか。いずれにしろ、これらのモットーはとりわけイスラーム性を感じさせるものではなく、むしろ前述のテ



写真1 民主主義者党のロゴマーク



写真2 福祉正義党のロゴマーク

レビコマーシャル同様、「普通の政党」であることを有権者にアピールしている。福祉正義党の論理に拠れば、こうした規範こそが「イスラーム的」だともいえ、それは必ずしも有権者の感覚からかけ離れたものではない。

しかしながら、第1期ユドヨノ政権下で汚職の追及が進み、経済状況も悪くないことから、福祉正義党の「清潔」や「プロフェッショナル」は民主主義者党と比較してそれほど魅力的に映らなくなってしまった。福祉正義党幹部は「ユドヨノという津波に襲われた」ことを2009年選挙で横ばいに終わった最大の理由として挙げている⁽⁴⁾。

イスラームはもはや反体制のシンボルではなくなり、また世俗系政党のイスラーム化によって、イスラーム系政党はイスラームというアイデンティティを強調するだけでは票にならなくなってしまった。イスラーム系政党は世俗系政党と似たような主張をせざるを得なくなり、イスラーム系政党としての特徴が損なわれることとなったのである。

3. 伝統的宗教権威による政治的影響力の低下

前節で述べたように、プサントレンを率いる指導者はしばしば社会に大きな影響力をもち、集票力もある。スハルト体制下では唯一のイスラーム系政党であった開発統一党が主としてこうした「イスラーム票」を得ており、ゴルカルはこの切り崩しを図った。1999年以降においては民族覚醒党と開発統一党がこうした票に頼ってきたが、世俗系政党も支持を得ようとプサントレンに接近している。

しかし2009年選挙で明らかになったのは、プサントレン指導者など伝統的宗教権威による政治的影響力の低下である。すなわちウラマーやキアイと呼ばれる指導者による集票力に陰りがみえるのである。ウラマーやキアイは多くの場合世襲されてきたが、ウラマーも近代的学校制度を享受することによって、その特権的な立場を弱められることとなった。学校教育の普及やさまざまな情報ソースの浸透によって、宗教的知識はウラマーの独占物ではなくなり、その「カリスマ」にも陰りがある。

2009年の大統領選挙において東ジャワを中心としたNUのキアイたちは、ユスフ・カラとウィラントの正副大統領候補を支援した。しかしながら、カラ組はユドヨノ組に完敗したどころか、東ジャワ州ではただひとつの選挙区でも勝

でず、メガワティ組の得票すら下回ってしまった。

地元の開発事業に対する賛否など、ときに伝統的宗教権威の政治的影響力が大いに発揮されるケースはあり、依然としてウラマーの集票力も侮ることはできない。しかしながら、伝統的宗教権威に依存している政党は軒並み票を減らしており、ウラマーやキアイの長期的な政治的影響力の低下傾向は否定しがたい。このことは第4節において、地方の投票動向からさらに検討していきたい。

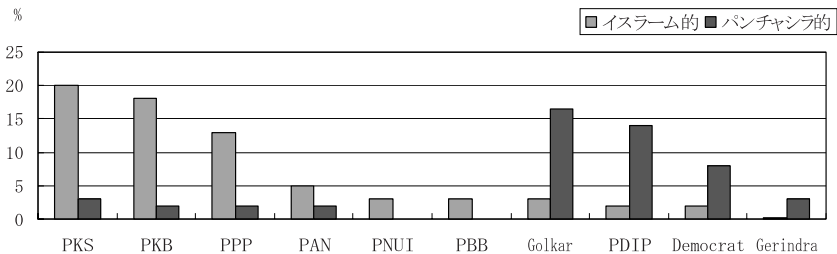
第3節 イスラーム系政党を選ぶとはどういうことか ——世論調査から——

以上のような分析、とりわけ世俗系政党との差異縮小と伝統的宗教権威の政治的影響力低下の根拠として、本節では世論調査を、次節では個別地域における選挙結果の推移を検討する。

インドネシア世論調査研究所（LSI）は総選挙の約半年前の2008年8月にムスリムのみを対象に世論調査を行い、イスラームとナショナリズムのイデオロギーと関連した有権者の政党選好について分析を行っている（LSI [2008]）。

もっともイスラーム的／パンチャシラ的な政党を問う質問（図2）では、まず有権者が依然としてイスラーム系政党と世俗系・ナショナリスト系の政党を区別していることがわかる。パンチャシラとはインドネシアの建国5原則を指し、その第1原則「唯一神への信仰」においてイスラームは他の公認宗教と同

図2 もっともイスラーム的／パンチャシラ的な政党はどれか？



（出所）LSI [2008]。

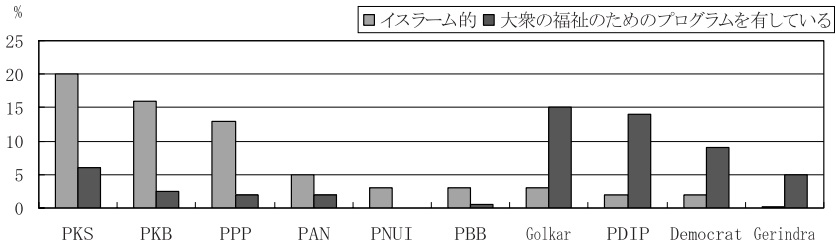
（注）政党の略称は以下のとおり。PKS：福祉正義党、PKB：民族覚醒党、PPP：開発統一党、PAN：国民信託党、PNUI：信徒連盟統一党、PBB：月星党、Golkar：ゴルカル党、PDIP：闘争民主党、Democrat：民主主義者党、Gerindra：グリンドラ党。

等に扱われている。ここでの「パンチャシラの」とはナショナリスト的と同義とみなして構わないだろう。「もっともイスラーム的」であるとみなされているのは福祉正義党（20%）であり、民族覚醒党、開発統一党が続いている。他方で国民信託党を「もっともイスラーム的」とみなしているのは5%にすぎない。「もっともパンチャシラの」ないしナショナリスト的とみなされているのはゴルカル党で、闘争民主党、民主主義者党、グリンドラ党と続く。

「もっともイスラーム的／大衆の福祉のためのプログラムを有している政党はどれか？」という質問に対しては、回答者が「大衆の福祉のためのプログラムを有している」とみなしているのは「パンチャシラの」な政党である（図3）。この質問は「イスラーム的」か「大衆の福祉のためのプログラム」かの二択を回答者に迫るものであり、ナショナリスト系の政党が「大衆の福祉のためのプログラム」を有しているという回答を得るのは当然の結果ともいえるので、割り引いて考える必要がある。ただし、イスラーム系政党のうち、例外的に「大衆の福祉のためのプログラムを有している」とみなされているのは福祉正義党であることは重要であろう。他のイスラーム系政党が後退するなかで、福祉正義党が健闘している理由のひとつとみなすことができるだろう。次の図4、図5が示すように、有権者は政党や政府に対して宗教勢力の利益代表やイスラーム化の推進を求めているからである。

「政党のどのような特徴がもっとも重要か」という質問（図4）に対しては、大衆の利益や福祉を配慮することが重視されており、あわせて約6割にのぼ

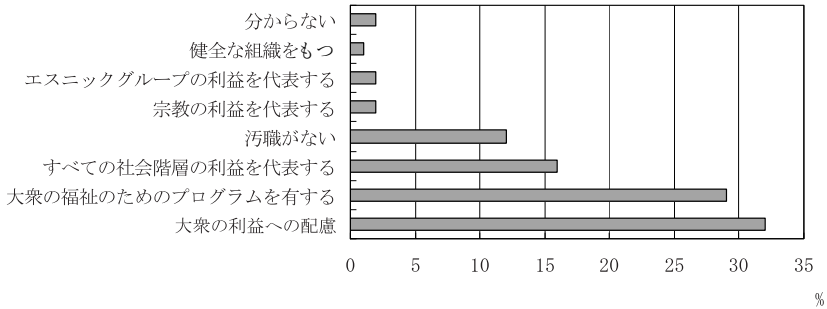
図3 もっともイスラーム的／大衆の福祉のためのプログラムを有している政党はどれか？



（出所）LSI [2008].

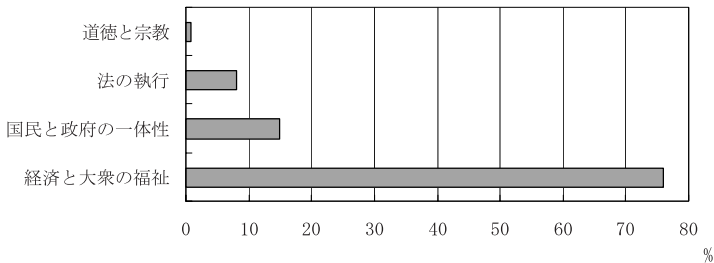
（注）政党の略称は図2に同じ。

図4 次の特徴のうち政党がもつべきもっとも重要な要素はどれか？



(出所) LSI [2008].

図5 次の問題のうちもっとも政府が取り組むべき問題はどれか？



(出所) LSI [2008].

る。「汚職がない」も12%の回答者がもっとも重要だと考えているが、「宗教の利益を代表する」は2%にすぎない。「政府が取り組むべき問題は何か」との質問(図5)にも、大多数が「経済と大衆の福祉」と回答しており、「道徳と宗教」は1%に満たない。

以上の調査では、インドネシアにおいて従来ムスリムを区分する方法として用いられてきたサントリとアバンガンの差異は問題とされていない。過去の調査では、宗教儀礼を積極的に行う「敬虔なムスリム」がよりイスラーム系政党を支持するとの結果も出ている(見市[2005:181])。現在でも闘争民主党を嫌悪する「敬虔なムスリム」や、逆に福祉正義党を嫌悪する「敬虔でないムスリム」は少なくないと思われる。川村と東方は統計的手法による2004年選挙の分析を通じて、アラン・ポリティクスの継続を指摘するとともに、経済状況の

変動が投票行動に影響を及ぼしているとしている（川村・東方 [2009]）。上記の世論調査からも、支持政党が「イスラーム的」であるかや宗教的プログラムの推進をしているかが、あまり重視されていないことが示されている。前節で指摘した世俗系政党との差異の縮小はこうした有権者の選好の変化が一因であるともみることが可能であろう。

第4節 地方の投票動向から

最後に特定地方の投票動向を分析することで、これまでの議論を検証していきたい。民主主義者党の躍進や伝統的宗教権威の影響力の低下といった状況や動向は全国ほぼ一様に観察されるものの、各地方における特殊な条件や動向も存在する。本節ではこれまで比較的イスラーム系政党が強かったナングロ・アチェ・ダルサラーム州（以下アチェ州）、南カリマンタン州、東ジャワ州第3区における投票動向を順にみていく。いずれもイスラーム系政党の得票率は低下しているが、各地域の政党勢力図やイスラーム系政党の支持基盤は異なり、得票率低下の割合やその理由も一様ではない。

1. アチェ州——地方政党の登場とイスラーム系政党の劇的な敗退——

イスラーム系政党の得票率がインドネシア全国でもっとも大幅に減少したのはアチェ州であった。アチェ州はダヤ（Dayah）と呼ばれるイスラーム寄宿学校（ジャワでいうプサントレン）を拠点とする宗教指導者（ウラマー）が権威をもち、またイスラームはアチェ人としてのアイデンティティと分かちがたい重

表1 アチェ州における国会選挙の結果（1999～2009年）

1999年選挙	得票率 (%)	2004年選挙	得票率 (%)	2009年選挙	得票率 (%)
開発統一党	28.8	ゴルカル党	16.7	民主主義者党	34.8
国民信託党	17.9	開発統一党	14.5	ゴルカル党	9.2
ゴルカル党	15.6	国民信託党	12.9	福祉正義党	7.1
闘争民主党	12.7	改革星党	7.7	開発統一党	5.4
月星党	3.1	福祉正義党	7.3	国民信託党	5.2
有効投票総数	988,622		1,829,054		1,838,916

（出所）筆者作成。

要性をもってきた。中央政府への反発も手伝ってイスラーム系政党は継続して強力な地盤を維持し、1955年選挙ではマシユミ党などが9割以上を得票、スハルト体制下でも1977/82年選挙では開発統一党がゴルカルを上回って過半数を獲得していた。民主化後も、1999年選挙は開発統一党を筆頭にイスラーム系政党が多数派を占めた。2004年選挙は開発統一党の分裂によってゴルカル党に首位を明け渡したものの、開発統一党と改革星党の得票率を単純に合計すればゴルカル党を大きく上回った。また過去2度の選挙では、スマトラ島の他地域と同様に都市部で国民信託党と福祉正義党が比較的多くの支持を集めてきた。

2009年選挙においては、これまでの独立闘争と2004年の津波被害後の和平という特殊事情により、アチェにおいてのみはじめて地方政党の設立と地方選挙（州および県・市議会議員選挙）への参加が認められた。その結果、地方議会選挙では自由アチェ運動（GAM）を基盤としたアチェ党が得票率46.9%で議席の半数近くを得た。他方、国会選挙では前回7%にすぎなかった民主主義者党が34.8%を得票、大統領選挙に至っては約9割がユドヨノ組を支持する圧勝であった。なお2004年の大統領選挙第1回投票においてはアミン・ライス組がユドヨノ組に大差をつけて1位であった。

州知事イルワンディ・ユスフの押すアチェ党は、ユドヨノ大統領が再選されるというおおかたの予想を反映し、民主主義者党との事実上の選挙協力をしたといわれている。多くの有権者はユドヨノへの圧倒的な支持というよりは、アチェにおける和平の継続をユドヨノ支持に託したようである⁽⁵⁾。民主主義者党は州議会でも議席を伸ばした唯一の全国政党であり、アチェ人以外の人口も多い州都のバンダ・アチェ市議会ではアチェ党を上回った。

他方、開発統一党や国民信託党などのイスラーム系政党は得票を3分の1ほどまで減らし、2004年選挙では健闘した改革星党は州議会でも1議席も獲得できなかった。アチェ党はナングロアチェ・ウラマー会議（MUNA）を結成、イスラーム系政党の地盤にも切り込んだ。この組織は2009年になって設立されており、いわゆる組織票を狙ったというよりは、ウラマーの支持を得ているという象徴的な意味合いが強いと思われる。地方政党には1999年以降に設立されたアチェ・ダヤ・ウラマー協会（HUDA）に属するウラマーたちが結成したアチェ主権党もあったが、州議会ではわずか1議席に甘んじた。他地域でも同様であるが、「一国一城の主」たるウラマーたちは概して独立心が強く、政党への

支持は分裂する傾向にある。

アチェ人は外部勢力に対して警戒心が強く、また宗教的には有力ダヤのウラマーが権威を握っているといわれる。2005年の津波の被害にいち早く救援に駆けつけた福祉正義党が横ばいに終わったのはそうした背景があると思われる。また断食月におけるバーやディスコなどの襲撃で知られるイスラーム擁護戦線（FPI）も津波後の救援部隊を送り込んだが、まったく定着をすることができなかった⁽⁶⁾。その意味で、民主主義者党の同州での躍進は異例であったが、同党およびユドヨノへの支持がアチェの安定に寄与するという冷徹な判断を背景としていたとみるべきだろう。

2. 南カリマンタン州——じり貧の既存政党、福祉正義党の定着——

南カリマンタン州はアチェと同様に伝統的なイスラーム寄宿学校を中心としたジャワ島外におけるイスラーム教育の拠点である。トゥアン・グルと呼ばれる「カリスマ的」なウラマーが尊敬を集め、政治的な影響力をもってきた。1955年選挙ではNU党が49%、マシュミ党が33%とイスラーム系の2大政党が得票を独占した。しかしアチェ州とは違い、ここでは1987年選挙以降、スハルト体制下の3回の選挙ではゴルカルがつねに70%以上を維持する圧倒的な強さを誇ってきた。NUの幹部が州知事に任命されるなど、顕著な懐柔策がとられた。民主化後もゴルカル党は第1党の座を保っているものの、得票率は徐々に低下している。同時に、開発統一党、闘争民主党というスハルト体制期から継続する政党、民族覚醒党、国民信託党という民主化後の主要イスラーム系政党も選挙のたびに得票を減らしている。

表2 南カリマンタン州における国会選挙の結果（1999～2009年）

1999年選挙	得票率 (%)	2004年選挙	得票率 (%)	2009年選挙	得票率 (%)
ゴルカル党	24.1	ゴルカル党	20.8	ゴルカル党	16.8
闘争民主党	21.2	開発統一党	14.2	民主主義者党	15.6
開発統一党	19.0	福祉正義党	10.7	福祉正義党	10.7
民族覚醒党	9.0	闘争民主党	8.9	開発統一党	10.4
国民信託党	8.8	国民信託党	8.0	闘争民主党	7.0
有効投票総数	1,486,031		1,557,199		1,463,490

（出所）筆者作成。

プサントレンが多いバンジャル県および内陸のタピン県、北・中・南フルスンガイ県においてイスラーム系政党が強く、1999年選挙ではイスラーム系諸政党が世俗系諸政党の得票を上回っている。ただし地域によってプサントレンと政党の関係は異なり、政党支持は一樣ではない。2004年選挙では、福祉正義党がプサントレンの牙城に切り込んで、中・南フルスンガイ県で第1党に躍進した。内陸の山間部で福祉正義党が第1党になったのはきわめて異例のことだった。同党が躍進したのはNUと政党の結びつきが弱い地域であり、候補者が有力プサントレン出身でウラマーたちとの関係が良かったこと、さらに南カリマントンで尊敬を集めるアラブ系のハビーブ（ムハンマドの子孫）の権威を巧みに利用したことが全国でも珍しい結果を生んだ（見市 [2005]）⁽⁷⁾。福祉正義党は2009年選挙でも横ばいの得票率を維持しており、一時的なブームではなく、地場を固めている。

3. 東ジャワ3区——NUの分裂、キアイの影響力低下——

11の選挙区に分かれている広大な東ジャワ州はかなり地域差が大きい。本節ではシトゥボンド県、バニユワング県、ボンドウオソ県にまたがる東ジャワ3区を取り上げる。その形からタバル・クダ（馬蹄）と呼ばれるこの地域およびマドゥラ島はイスラーム系政党が強力な地盤を維持し、他方、ヒンドゥー王国のマタラムの中心地であったマタラマン地域およびスラバヤ、マランの都市部では世俗系の政党が強い。タバル・クダ地域およびマドゥラ島には熱狂的なNU支持者が多く、また数万人の票を動かすような「カリスマ的」キアイが存在する。したがってイスラーム系政党のなかでもNU系の諸政党が強く、国民

表3 東ジャワ3区における国会選挙の結果（1999～2009年）

1999年選挙	得票率 (%)	2004年選挙	得票率 (%)	2009年選挙	得票率 (%)
民族覚醒党	55.3	民族覚醒党	39.8	民主主義者党	16.2
闘争民主党	22.5	闘争民主党	16.7	闘争民主党	15.3
ゴルカル党	9.3	ゴルカル党	12.5	ウラマー-国民覚醒党	15.0
開発統一党	3.4	開発統一党	11.7	民族覚醒党	11.6
国民信託党	3.0	民主主義者党	4.8	開発統一党	9.6
有効投票総数	1,681,716		1,722,167		1,319,196

（出所）筆者作成。

信託党や福祉正義党は都市部でも浸透していない⁽⁸⁾。同じNUを基盤とする南カリマンタン州に比較すると、キアイの政治化が顕著で、国民信託党（ムハマディヤ）や福祉正義党などへの反感や警戒心も強い。なお、バニユワンギ県は他の2県に比較してイスラーム系諸政党の割合は低く、1999年選挙では合計6割程度（シトゥボンド県とボンドウォソ県は8割前後）である。

東ジャワ3区では、1999年選挙は民族覚醒党が圧倒し、なかでもボンドウォソ県では有効投票数の68.5%が同党に集中した。ところが2004年選挙では民族覚醒党を事実上率いるワヒド元大統領との関係悪化から開発統一党への支持を表明するキアイが現れ、とくにシトゥボンド県では開発統一党に約10万票が流れた。

2009年選挙では、民族覚醒党およびNUのさらなる内部分裂が悲劇的な結果をもたらした。タバル・クダ地域にはワヒドに対する忠誠心が強いNUメンバーが数多くおり、他方で地域的にはきわめて強い影響力をもつキアイが多数存在する。ワヒド派の民族覚醒党が認められず、また有力なキアイたちがウラマー国民覚醒党という新党を結成したために、民族覚醒党の得票率は3分の1以下まで落ち込んだ。前回選挙より有効投票総数が約40万票減ったのも民族覚醒党の分裂が一因であろう。ウラマー国民覚醒党は上位2党に肉薄したが、全国平均では最低得票率に及ばなかったために20万票近くが「死票」となり国会の議席を獲得することができなかった。

この選挙結果はむしろ地域によってはウラマーの政治的影響力が依然として大きいということを示している。とくにシトゥボンド県議会選挙では開発統一党とウラマー国民覚醒党が民主主義者党の得票を上回って上位を占めた。シトゥボンドでは2008年後半にイスムナルソ県知事の逮捕にまで至る汚職事件があったが、この捜査が進展したのは開発統一党の有力キアイであるアフマド・ファワイドがプサントレンの生徒を動員して幹線道路を3日間封鎖するという大規模なデモを行ったためであった。しかし、独立心の強いキアイが互いに協力することは難しく、またキアイの相対的な権威の低下や有権者の意識の変化によって、選挙におけるキアイの影響力は徐々に弱まっていると結論づけることができるだろう。

おわりに

以上みてきたように、今回の選挙でイスラーム系政党が後退した背景には、インドネシア社会の中長期的な変化があった。大学キャンパスのイスラーム化は福祉正義党のようなイデオロギー政党を生んだが、有権者の大半はイスラーム国家化やイスラーム刑法の適用といった政策は望んでおらず、政党側もそうした政策をあからさまに主張することはない。他方、世俗系政党もイスラーム的装いをするようになり、イスラーム系政党との差異は目立たなくなってきた。

民主化後最初の選挙では「改革の旗手」として一定の支持を受けたイスラーム系政党であったが、次第に新鮮さを失い、また内部分裂によって、選挙のたびに得票を減らしている。ウラマーの政治への関与の仕方や動員力には地域的な差異が大きいが、一般的にはその政治的影響力は長期的な低下傾向にあると思われる。このように、政党組織の弱体化、選挙イシューの非宗教化、そして宗教指導者の脱カリスマ化といった3つの要因が直接的にはイスラーム政党全般にみる得票の低迷をもたらしている。しかし、それらは長期的な社会変容の必然であり、教育の近代化やメディアの普及と多様化にともなう政治意識の大きな変化を反映している。世論調査が示すように、国民の多くが政治に期待することは福祉や経済である。また長年続いた各地の「宗教紛争」も下火になり、都市部での爆弾テロにはむしろ強い反感がある。そういう時代にイスラームという宗教アイデンティティだけで票を伸ばすのには大きな限界がある。開発政策や産業振興、そして福祉政策のビジョンを示すことなしに、イスラーム系政党が今後飛躍する可能性は低い。特定支持層だけを狙った原子化政党への道を歩むのか、それとも規模の拡大を目指して包括政党に変容していくのか。イスラーム系政党はその岐路に立たされている。

【注】

- (1) 上記の世論調査では7%がムハマディヤに帰属意識をもつと回答している。見市 [2004: 102]。
- (2) 2007年に出された福祉正義党の『闘争の基本思想』の巻頭には、同党が「正

義]にもとづく社会変革を目指すことが図式化され、その最上位に「タウヒード(神の唯一性)が生活を規定する基礎である」と明示されている(PKS [2007: ii])。

- (3) 1999年選挙において闘争民主党は候補者にムスリムの割合が少ないとイスラーム系政党の批判を受けた。
- (4) 2009年8月23日に福祉正義党本部において行った複数の幹部からの聞き取りによる。
- (5) アチェ党と民主主義者党の協力は明示されたわけではないが、多くの人々がそう受け取ったという(Gatra誌2009年4月23～29日号)。なお本名純氏によれば、アチェ人の元軍管区司令官でユドヨノ側近のジャリ・ユスフが仲介してアチェ党との協力を進めたとのことである。
- (6) FPIのアチェ代表ユスフ・カラダーウィーは「同じ組織だが指揮下にあるわけではない」、「私はFPIよりアチェ・ムジャヒディン戦線の代表である」とジャカルタのFPI本部との差異およびアチェの独自性を強調している。インタビュー、2009年10月18日。
- (7) 福祉正義党から国会議員に連続当選したハビブ・アブ・バカルは2005年の州知事選で副知事候補になり僅差で敗れたが、2010年に予定されている州知事選でも副知事候補に取りざたされている。
- (8) 東ジャワ州唯一の例外はラモンガン県で、ここにはムハマディヤやイスラーム統一協会など近代主義・改革主義イスラーム系の学校が多く存在し、国民信託党への支持も比較的大きい。

【参考文献】

〈日本語文献〉

川村晃一・東方孝之 [2009] 「インドネシア：再生した亀裂投票と不明瞭な業績投票」(間寧編『アジア開発途上諸国の投票行動——亀裂と経済——』アジア経済研究所 265-327ページ)。

見市建 [2004] 『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』平凡社。

—— [2005] 『『イスラーム票』はどう動いたか——南カリマンタン州における福祉正義党の躍進から——』(松井和久・川村晃一編『インドネシア総選挙と新政権の始動——メガワティからユドヨノへ——』明石書店 176-201ページ)。

〈外国語文献〉

Lembaga Survei Indonesia (LSI) [2008] “Kekuatan Elektoral Partai-Partai Islam

- Menjelang Pemilu 2009” [2009年総選挙へ向けたイスラーム諸政党の勢力].
Partai Keadilan Sejahtera (PKS) [2007] *Filsafah Dasar Perjuangan* [闘争の基本思想], Jakarta: Majelis Pertimbangan Pusat Partai Keadilan Sejahtera.
Uchrowi, Zaim [2004] *Mohammad Amien Rais: Memimpin dengan Nurani* [誠実な心で指導する], Jakarta: The Amien Rais Center.